

< 事例報告 1 >

ひゅーるぼんの学生ボランティア活動

NPO 法人コミュニティリーダーひゅーるぼん 川口 隆司
中田 宏美
松尾 真美

川口 みなさんこんにちは。今日はありがとうございます。たくさんの方がいらっしゃって凄いなと思って、ここではなくて隣のガス店なのですが…。NPO は追い風だ追い風だといわれながらも、やはりがんばらなければいけないと思いました。広島から来ましたのでどうぞよろしく願いいたします。私は川口と言います。

今日は私以外に二人来まして、彼女たちは今学生なのですが、青少年の健全育成ということで、彼女たちは二人とも高校生のときからうちのグループで活躍をしてくれている、うちではみんな入ったらリーダーといって、リーダーなのですが、彼女たちの事例、活動にどうして入ったのかや、活動の中でどんなことをしてきたのか、あるいは活動の中で感じたことなど、大変エッセンスの詰まった話を二人がたぶんするのではないかと思います。私も一度だけ原稿を見たのですが、たぶんこれから青少年の方と一緒に活動されていきたい、今やっているなどという方々にとっては、とっても良いヒントがぎっしり詰まった発表になるかと。この発表の中から読み取っていただきたいと思っています。

それでは自己紹介を。

中田 NPO 法人コミュニティリーダーひゅーるぼんの中田宏美です。よろしくお願いします。

松尾 同じくひゅーるぼんの松尾真美です。よろしくお願いします。

川口 それではパワーポイントを使ってやっていきたいと思います。

松尾 私たち NPO 法人コミュニティリーダーひゅーるぼんは、学生、社会人が一緒に活動しており、現在ボランティア約 150 名、スタッフ 9 名で活動を展開しています。次に私たちの歴史について子どもたちに関わることを中心に紹介していきます。

1981 年 7 月、地域の障害児夏休み学級を支援する高校生、大学生により、現在でも季節のプログラムとして子どもたちが楽しみにしているキャンプや雪遊びの余暇支援活動が始まりました。これが現在のひゅーるぼんの始まりです。1983 年グループ名をひゅーるぼんにし、土日の障害児余暇支援活動を開始しました。後にこの活動はコミュニティ共室「ぼんきっず」として定着しました。1998 年より NPO 法人取得も含めたこれからの活動のあり方についての検討委員会が発足しました。より日常的な子どもたち全般の支援を行いたいという思いから、2001 年、念願の子ども

たちとリーダーのための活動拠点ができ、地域を巻き込んだ、あったかなまちづくり活動を行っています。

中でも私たちの活動の中心になるのは、不登校の子どもや障害のある子どもの心と居場所支援プログラム、「じゃんけんぼん」です。今年の4月からは障害のある人たちの地域生活を支援するコミュニティほっとスペースひまわりが活動しはじめました。

中 田 それでは次に私たちの活動とその内容について紹介します。私たち NPO 法人コミュニティリーダーひゅーるぼんは、子どもたち、障害のある人たち、地域の人たちが共に生き生きと楽しく、相互につながりながら、あったかに暮らしていけるまちづくりを目指して、そのための支援とまちづくり活動をしているグループです。

具体的には活動は大きく三つのプログラムで構成されています。その一つ目はコミュニティスペースプログラムです。このプログラムは私たちの中心となるプログラムで、子どもたち、障害のある人たちの心の拠点づくりや余暇の支援活動を行っています。川内という場所にあるほっとスペースでは、障害のある子どもたち、不登校の子どもたちなど、主に 18 歳未満の子どもたちを対象とした活動を行っています。子どもたちの気持ちを大切にしたフリースクールのような役割を持つ「じゃんけんぼん」という活動が毎日行われています。また、土日や夏休みなどお休みには、子どもたちの余暇を支援する「ぼんきっず」やキャンプ、雪遊びなどの活動を行っています。

祇園という場所にある「ひまわり」では、18 歳以上の障害のある人たちの社会生活の支援を行っています。ここは一般的には作業所と呼ばれていますが、働くことの支援だけでなく、芸術活動などを通して、生きがいや余暇の活動の支援に重点をおいて活動を行っています。これら二拠点の活動は、ボランティアとスタッフが一体となって企画、運営されています。

プログラムの二つ目はまちづくりフロンティアプログラムです。コミュニティスペースプログラムで感じた思いや願いを社会に伝えたり、提案したりする活動です。まちづくりのためのワークショップを行ったり、講演会、コンサートなどのイベントを行ったり、行政、関係団体、ボランティアの皆さんとあったかなまちづくりを考える会議を開いたり、広報誌を発行したりと、様々なかたちでまちや人にアプローチする活動を行っています。ひゅーるぼん以外の方との出会いが多く、視野が広がる活動でもあります。

プログラムの三つ目はコミュニティボランティア参加育成支援プログラムです。高校生、大学生がボランティア活動に参加するためのきっかけ作りのプログラムを実施したり、実際にボランティア活動に参加したい学生の為の活動相談や調節を行ったり、ボランティア活動についての研修を行ったりしています。

また、講師の派遣も行っています。スタッフの一人にボランティアコーディネーターがいて、私たちはいつでも活動について相談ができるようになっていきます。活動が始めての人にとっては、このコーディネーターのお姉さんは大変心強い存在だと思います。

これらプログラムの三つの柱とは別に、後で述べる高校生が中心となって企画と運営を行う「びんぼんばん部会」というものがあります。私たちの活動はすべて月に一度行う定例会で話し合ったことを元に、その活動をやりたい人が集まって進められます。強制などではなく、自分がやりたいことを自分のペースでできるのがひゅーるぼんの良いところだと思っています。

次に、私たち自身の体験を元に思ったり、感じたり、考えたことなどを具体的に活動を紹介しながら説明をしていきたいと思っています。

中 田 私がボランティア活動に出会ったのは中学生の時です。私の学校はちょうど福祉教育の推進校だったため、校内でのボランティア体験や地域の施設訪問などが割と活発に行われていました。そういったボランティア活動に参加することで、真新しさ、おもしろさ、充実感といったものが得られたように思います。

ひゅーるぼんに出会ったのは高校に入学してからです。何かしたいという思いからボランティアグループを探し、ひゅーるぼんに入会しました。ひゅーるぼんに入って初めて体験した活動は、地域の福祉運動会という活動で、障害のある子どもを始め、大人、お年よりの方まで、たくさんの人や団体の方がいらっしゃいました。このような活動は初めてだったため、地域って色々な人がいて何だか広い、これだけ色々な人が集まるってすごいなと感じました。ひゅーるぼんデビューだったため緊張していましたが、それはひゅーるぼんのやさしく面白い人たちが声をかけてくれて、雰囲気にもすぐに馴れ、楽しく充実した時が過ごせました。この面白い人たちとまた活動をしてみたいという気持ちから、気がつくとそのからの活動はほとんど行くようになっていました。

夏にはひゅーるぼんに来ている子どもたちを対象にしたキャンプがあります。「面白いよ、ひゅーるのキャンプは」と夏休み前から聞いていたので、子どもたち同様、私自身もわくわくしながらキャンプを心待ちにしていました。実際のキャンプはそれ以上に面白いものでした。子どもとの関わりなど不安もありましたが、経験のあるリーダーがフォローをしてくれて、気がつけば楽しいままにキャンプを終えていました。キャンプが終わった後で、何故ひゅーるぼんの活動が楽しいのかとふと考えてみたことがあります。思い返してみるとキャンプには、子どもが正体不明の怪獣に襲われたり、キャンプの中を特別仕立のバスが走ったり、感動のエンディングが用意されていたりなど、だれもがあっと驚くような準備やしかけがありました。キャンプ前、企画していると、企画しているリーダーが「おもしろいよ」といった言葉には、企画する楽しさが伝わってくる活動という気持ちがこもっていたのではないかと思いました。それで参加するだけでも十分に楽しいけれど、もしかしたら企画するほうが何十倍も楽しいのではないかと私は考えました。

おそらくこのあたりからひゅーるぼんの活動にはまってきたのではないかと思います。入会して半年、高校生の中で私たちだけで企画して何かやってみようという意見がありました。それで高校生が集まり、自分たちが中心となって企画して活動を行う「ぴんぼんぱん部会」を立ち上げました。その中で地域の老人ホームにワークキャンプに行くことを決め、何回も話し合いをし、活動内容を考えたり、そのための準備をしたりしました。話し合いといっても高校生が集えば話が脱線してしまったり、なかなか決まらなかったりと大変で、計画どおりには進まないことも度々でした。そんな時、いつもそばにいて手助けをしてくれたのがボランティアコーディネーターのお姉さんと団長でした。そして何とか企画が形になり、当日は15人の高校生でワークキャンプをすることができました。

キャンプのメインの活動は高齢者とのふれあいと施設の中にある喫茶コーナーの壁画の作成です。元となる絵は高校生がそれぞれデザインし、高齢者の皆さんの希望を聞いて、一番人気の高かった絵を作成しました。喫茶コーナーの壁面にいっぱい書かれた大きな絵を皆さんとても喜んでくださいました。その他、ゲームや行事に参加し、一緒に過ごすことでお年よりの方との関わりや施設のことを学ぶことができました。その後、ワークキャンプは3回続きましたが、高校生だった私たちはこの活動を通して、ただ単に施設のことやお年より方について学べたというだけでなく、企画していくこと、新しいリーダーはどんな活動に興味を持ち、どうしたらリ

ーダーが増えるのかなど考えるようになりました。

高校生の話し合いはスムーズに進むことはありません。でもそれは見方を変えると色々な話をして和む場、居場所でもあるからではないかと思います。そういう空気があるから何かをしたいという思いが生まれ、そしてそれを形にしていこうというエネルギーが生まれてくるのだと思います。そしてそこには仲間同士でそのおもしろさを共有する喜びのようなものがあります。どうしても形にならない時や行き詰まった時には、相談できる大学生、社会人リーダーもいます。今度は私たちが高校生部会での経験を活かし高校生の活動をフォローしていく側になっていきたいと今思っています。

次にひゅーるぼんの活動の中でも、特にまちづくり関係の活動について一つ事例を紹介します。これは古川の川づくりワークショップという一昨年の春から秋にかけて行った活動です。私たちの地域である安佐南区には古川という川が流れています。当時、その古川をみんなが利用しやすい水鳥緑道として整備する計画が建設省と広島市で進められていました。その計画を進めるにあたってひゅーるぼんの協力依頼があったのです。私たち学生もこのメンバーに加わり、行政や企業さんと一緒に様々視点や立場で、古川の土手沿いや水辺を点検しました。点検の後はこんな川にしたいという思いで、「ここがこうだったらみんなに使いやすい」など、具体的な意見や改正案を考え提案しました。行政の方と一緒にするという事で、私たち学生にとってはそれなりの緊張感がありましたが、楽しく、そして真剣に取り組めた活動でした。学生も子どもたちもお年よりも、みんなが利用しやすい、そして集うような古川をイメージしながら、改善プランを真剣に考えました。そして数ヵ月後建設省から作成された整備計画の説明を受け、とても驚きました。私たちの意見がたくさん取り入れられていたからです。子どもたちの遊ぶスペースや水場、水場に降りる緩やかなスロープ、休憩できるベンチ、高齢者も体の不自由な人も、子どもも安心して歩ける散歩道、道沿いの高さを工夫した花壇など、ビックリするようなあったかな古川の姿がありました。そして今、古川は私たちの意見を基に工事が進められています。この活動を今振り返って考えてみると、ひゅーるぼんと子どもたちを始め、障害のある方、古川の自然を守る環境ボランティア団体、その他大勢の地域の人と、建設省や広島市、企業の方が一緒に川づくり、まちづくりをしていくことは本当に大切なことだと思いました。こういう形でまちづくりが進めば、地域、まちは自分たちにとって、とてもやさしいものになっていくのだと感じました。地域の人たちと行政や企業が一緒になってまちづくりをしていくことは決して特別なことではなく、みんなが暮らしやすいまちをつかっていくためには大切なことだと思います。たくさんの方の人たちがこういったことに興味を持ち、社会参加していくと、もしかしたら地域はもっともっと変わっていくのかなと思いました。

この活動がきっかけになり、去年は一年間をかけて広島市中心部にある地下街シャレオとその周辺を対象に、「やさしさ倍増プロジェクト」というワークショップも行いました。普段私たちが利用するまちの中心部のワークショップは大変わくわくする活動でした。

ひゅーるぼんの活動を通して、たくさんの方の経験、学び、発見、色々な人との出会いもありました。私にとってひゅーるぼんは、たくさんの方の仲間、子どもたちと共にほっとできる居場所でもあり、またあったかなまちづくりが始まっていく拠点であります。またそうした活動のおもしろさを伝えてくれるところであると思います。

松 尾 私も中田さんと同じように、高校一年生の時に、子どもたちや高齢者と関わってみた

いという思いからひゅーるぼんに参加しました。私は子どもたちとの活動について述べたいと思います。

高校生のときにはひゅーるぼんの中でも、高校生部会「ぴんぼんぱん」に所属していました。そのとき特に印象に残っているのは、私たちが計画した「アトムでGO!」というプログラムです。アトムとはアストラムラインの略で、安佐南区を走っているモノレールのことです。この企画は高校生の間で、アトムに乗って子どもたちと一緒に色々な駅で乗ったり降りたりできたら楽しいねという話から始まりました。計画を実施するにあたり、どのようにしたら楽しいか、また、ただアトムに乗ったり降りたりするだけでなく、何か工夫できることはないかなど、私たちの頭を悩ます問題は数多くありました。それらの問題を解決することは様々なことを考慮しなければならず、簡単ではありませんでした。しかし当日はアトムに何度も乗り降りをしたり、沿線のまちを探索したり、広い公園で思いっきり遊んだり、子どもたちの満足した顔を見ると、この計画を子どもたちとやってよかったと思い、充実感でいっぱいでした。そして下見やルールの決定、小道具の準備など、私たちに足りないところは社会人のリーダーに手伝ってもらった所もありましたが、最初から最後まで私たちの手で企画を実行できたことは、私たち自身の大きな自信につながりました。

ひゅーるぼんの子どもたちとの活動の一年は、「じゃんけんぼん」、「ぼんきっず」のプログラム以外に、キャンプ、ナイトウォーク、雪遊びなど、その季節ならではの計画があり、子どもたちもこのビックイベントを楽しみにしています。今年の夏は初めてキャンプの企画に参加しました。二回目のキャンプで企画に参加し、何をしたらよいのかわかりませんでした。仲間と共に過ごす大切さを感じ、子どもたちが生き生き出来る活動を展開していくことは、どのプログラムにも通じていくものがありました。また、「アトムでGO!」の企画に始まり、その他の企画において、自分たちがこうしたらきっと楽しいだろう、こんなことをやってみたい、が実現できる楽しさも感じています。キャンプでは日頃味わうことの出来ない経験をし、その中で子どもとリーダーの間に信頼関係が生まれました。子どもたちと一緒に活動し、感動を共有し、私自身にとっても忘れられない思い出がまたできました。

この夏はキャンプの企画だけでなく、自身にとって勉強になる経験もさせてもらいました。それは社会人のスタッフに交じり、ボランティアスタッフとして毎日を「じゃんけんぼん」の子どもたちと過ごしたことです。先程も説明したように、「じゃんけんぼん」とは不登校の子どもや障害のある子どもたちの支援プログラムです。「じゃんけんぼん」ではどの場面においても子どもたちがやりたいと思ったことを大切にし、それを私たちがサポートしていくという活動の形をとっています。だから子どもたちの、「やってみたいね」という一言にみんなが共感し、その計画が始まり、子どもたちを中心に、川に泳ぎに行ったり、散歩をしたり、料理、ゲーム、おしゃべりをしたり、無理に何かするのではなく、何もしないという時間も流れていきます。だから私は始め、そのペースにどう合わせていけば良いのか戸惑うこともありました。しかし自分は自分のペースでゆっくりと関わっていけば良いのだと考えるようになりました。日々子どもたちと接していく中で、面識のなかった子どもも、関われば関わるほど子どもとの心の距離が縮まっていく気がしました。そして子どもの内面に触れ、より深いところで関わりができるようになると共に、自身の心に正直に向き合えるようになっていた自分もいました。子どもが顔を覚えて名前を呼んでくれるとうれしいし、子どもたちともっともっと関わっていきたいという思いが強くなります。そして何時の間にか私のほうが子ども以上に会うのを楽しみにしていました。

人と接することは、そこに楽しい、うきうき、どきどき、わくわく、悔しい、悲しいなど様々な感情が生まれてきます。人と人が会い、関わりを持ち、繋がりを感じて生きていくことの重要性を改めて感じさせられます。このような関わりを通して、この夏の体験は自分の生き方をも見つめていくきっかけにもなりました。私が子どもたちと過ごしてみて教えられることはたくさんあります。一人一人違い、個性があり、だからこそ人はかけがえのない存在だということに気付かせてくれました。子どもたちのいきいきとした心に触れ、私自身、子どもと共に成長していきたいと思っています。

ひゅーるぼんを通して、子どもから高齢者まで様々な人と出会うことができました。その出会いの一つ一つが私を大きくしていているのだということに自覚し、これからもそんな生き方を大切にしていきたいと思います。そんなひゅーるぼんの雰囲気を表した様子があるので最後に御覧ください。

川 口 最後のところは、たまたま見つけたのですが、「じゃんけんぼん」という活動で不登校の子とスタッフの子が本当に生き生きと楽しくやっている様子が伝わったかと思います。何故あれを出したかという、何かああいう感じでうちのグループは活動が流れて行って、ずっとそんな感じで普段動いているのです。今日はその中で彼女等二人が色々なことを話してくれましたが、これは私が書かせたのではないです。本当に彼女たちが書いてきて、私もああそうかと思ってビックリしたのですが、若い人たち、青少年の人たちが活動に参加することの、活動展開していく効果というところを三つくらい話してみようかと思います。

一つは、一般的には結構年齢層が固まった人たちでグループを構成して動くことが多いと思いますが、若い人たちがうちには次から次へと入ってきます。去年、初めて来た若い人たちは一年間で185人です。そういった人たちが入ってくるということで、グループの考え方が固定化しないのです。柔軟な発想をやはり彼らは持っていますし、ただそれを引き出すための環境作りはいると思いますが。またそのボランティアの活動の中で大切なのはニードということだと思うのですが、若い人たちはやはり新しいニードの先取りをすることができるというか、新しい感性を持っていますから、そういったところで面白い活動をどんどん展開していくことができる。それがまた新しいボランティアを呼んでくるという一つ効果があるかと思います。

それから社会的にちょっと見てみると、地域の中に若い人たちが集える、心をポンとおいておける民設の場があるということとはとても良いことではないかと思うのです。これは公設民営のボランティアセンターや公設公営の公民館などありますが、すなわち民設であるということは関係がフラットなのです。フラットだからこそ色々なものが生まれやすいという、さっきの彼女たちの話の中にもあったと思うのですが、ボランティアというのは基本的に上下関係がないですから、そういうところで良いかなと。すなわち管理をする人もいないということです。

それから三つ目ですが、青少年発の、街への提言というところが大変社会にインパクトを与えるということです。さっき話があって、色々青少年がああだ、こうだという話がありましたが、結構青少年の人たちは社会的には否定的、悲観的な見られ方をされることが多いと思うのです。しかし私はそれよりも大人のほうが危ないなと思っているのですが、若い人たちから発することは大変大人の人たちに対して影響を与えます。社会を変えていくパワーは、大人が大人に言うよりも、若い人たちが大人に対してアプローチしていったほうが考えなどが変わりやすい。例えば私たちは地域の中で活動していますが、地域の学校などはなかなか学校開放などと言っている、

この間悲惨な事件などがあったりして、なかなかオープンしてもらえませんが、そういう時はうちは高校生などが行くのです。先生の所に話をしに行き、じゃあいいよ、とってうちのグループがそこで学校を借りたりなど。それはとても小さいことですが、あと以前は、高齢者の配食サービスをまだまだ全然始まっていない時に、やはりこれもうちの高校生が動き始めました。この時も自分たちでご飯を作ったりするのは大変なので、これも老人ホームのほうに配食の元となるご飯はおかずもすべて作ってもらって、高校生は配るだけというのをやったのですが、やはりこれがちょっと先駆的モデルになって、私たちの安佐南区はよその区に先駆けて一年前から配食サービスが始まったのです。そういうことなどがあります。そういった三つのことが活動展開の効果かと思います。

それから青少年の人たちがNPOに参加するということで、NPOの役割は何かということですが、一つ特に私が今日話をしておきたいことは、学校教育でも今、ボランティアと奉仕体験活動などが言われ始めています。奉仕活動の義務化などが言われていますが、本当のことをいうと私も実はこの間まで学校の先生をしていたのです。辞めてNPO専従になったのですが、学校ではやはり福祉教育の担当もしました。でも完全に違うのは、NPOの活動というのは下から立ち上がる活動だということです。学校教育はみんな上を向いていますから。先生も、教育委員会もそうですね。上ばかり向いて活動している。子どものほうに向くからボランティアというのは始まっていくのです。ところが上から決まったことを下に降ろしていくから変なことになってしまう。神戸のSくんの事件が起きた時に、ニュースステーションで久米さんが、全国の中学生のみなさんはこの事件を聞いてどう思いますかというのをニュースで投げかけたときに、中学生から投書が来ました。その投書の中に、「私は学校でやりたくもないボランティア活動をがんばってやっています」というのを言っていました。まさにそういったことが起こってくるということです。ただそれはまた後で述べますが、その良さというの、たしかに学校教育の中でやっていくということもあるにはあるのですが、下手にしてやるとそんなことになるということです。

それから二つ目ですが、やはり学校の活動は奉仕型の活動、いわゆるサービスに限定する。例えばゴミを拾いましょうとか、そういったことで限定された活動ですが、さっきの彼女たちの話の中にもあったように、NPOでやるというところはいわゆるサービスの提供だけではないのです。すなわちアクション型の活動があるというか、創造型の活動があるというか、自分たちで色々なものを見てきて、じゃあ次はこうしていこうという形にできる柔軟性があるというところ。ここが大きい違いではないかと。学校でもそういったことをできなくはないですが、学校はそればかりをやる場所ではないので。また先生も、「ボランティアをしろよ」という先生が、実はボランティア活動をやったことがないなどということがあったりします。なかなかその辺は難しいです。

それから三つ目ですが、NPOの活動というのは、彼女たちもそうですが、時間をたっぷりかけてボランティアをする人たちを育てていくことができるというところの良さはあるかと。特に私たちは青少年を対象にしています。青少年の子どもたちの心というのは疾風怒涛の時代という言葉方をしますが、思春期の心、大変影響を与えやすいのです。だからうちでボランティアの活動をしていて、最初は自分は経済学部で経済の勉強をしていると言っていた人たちが、「やはり私はこんな方向に進みたい」と気持ちを变える人たちもたくさん出てきます。私はそればかりが良いことだとは決して思いませんが、青少年の人たちの気持ちに関わっていこうと思ったら、それだけの覚悟というか、長い時間やエネルギーというのは絶対に私はいると思うのです。それをNPOの団体では時間をかけてやることのできる。それがおそらく若い人たちにとっては将来に希望が

持てるというか、夢が持てるということに繋がっていくのではないかということを思います。

私は青少年を育てるということは、大人の責任だろうと思っています。ただその責任というのは、大人自身の生き方というのがその責任に繋がっていく。本当にその大人一人一人の生き方に左右されると思っていて、うちのグループの中では若い人たちに希望や夢、そんなものではないかもしれませんが、まずは安心感をつくり出して、自分もあんな風にかんばってみたいと思えるような環境作りをしていこうということは大変気を使ってやっている部分でもあります。

後はまたゆっくりお話したいと思います。以上です。ありがとうございました。

< 事例報告 2 >

NPO法人農林水産環境管理協会の活動事例報告

NPO 法人農林畜水産管理協会 竹下 洋平

お集まりの皆様こんにちは。只今紹介にあずかりました NPO 法人農林畜水産管理協会の理事の竹下です。よろしくお願いいたします。

今日はこの場をお借りして、私たち NPO 法人の活動説明を簡単ですがさせていただきます。少しばかりですが皆様のお時間を拝借したいと思います。よろしくお願いいたします。

今回のパネルディスカッションのテーマが、青少年ボランティア活動などの促進ということで、私のやっている NPO に関する活動内容は、あまり直接的にボランティアに関わることではないので、簡単に説明させていただきます。

我が NPO 法人の具体業務をまず説明しますと、一つとして農林畜水産業およびそれに関わる組織の ISO14001 の構築および認証支援、二つ目に第一次産業を取り巻く環境問題改善のための諸調査や研究、三つ目として環境問題の取り組みに関する社会へのディスクローズ支援、四つ目に各種講演会、シンポジウム、研修会、講習会などの企画、開催。五つ目に農産漁村地域の自治体や農林畜水産業を支援するためのソフトウェア開発。六つ目に循環型社会モデルおよび環境教育モデルの設計、構築支援。以上の六つが主な具体業務になっています。

この一年は BSE 問題に代表される食の安全性について注目を集めた一年でした。このような中、私たち農林畜水産環境管理協会としては、特にトレーサビリティ、ディスクローズ、生産工程管理、環境保全という四つの方向から、農というものを見つめなおし、食と農の新しい関係について試行錯誤しながら考え、提案してきました。昨今の BSE 問題、食品偽装表示問題等により、農産物の不透明性が白日の下に晒され、今や農産物を販売するためには明らかに生産、販売を起点としたマーケティングだけでなく、実態の伴った消費者をも網羅したマーケティングのあり方が重要になってきています。私たちは、食の安全性、安心をキーワードとした信頼のおける農産物を生産する正統派産地の取り組みに対して少しでもお役に立つことができれば、そして食と農が今一度、線としてだけでなく空間として結びつけることができればと考えています。以上が私たちの団体の設立目的の簡単な説明になります。

続きまして青少年ボランティアに関する活動についてですが、これには何故農業分野における NPO なのかについてお話ししなければなりません。これは皆様のお手元にある資料の 12 ページに書いてあるものです。読ませていただきます。

何故 NPO なのかということについてですが、環境問題の改善を目指すのであるならば、他の農業関連団体でも十分に対応可能です。しかしながら現状では様々なしがらみの中でその取り組みは遅れているのが現実です。それが証拠に昨今では狂牛病問題を始めとする食品表示偽装問題や 0-157 に代表される食品衛生管理問題等が発生しています。よくこのような質問を耳にします。あなたは国産と国外産の農産物であれば安全性の上でどちらを指示しますか。これまではポストハーベスト農薬問題や、放射性照射問題等、消費者の目に見えない形で食品に農薬などを使用した防腐剤を導入することで農産物を輸入してきました。そのような消費者の目に届かない輸入農

産物の危険性に消費者は気づき、消費者の身近な場で生産される国内農産物を支持してきました。しかしながらこの状況は近年変わり始め、今や国産であっても狂牛病問題や食品偽装表示問題が横行する時代です。これまで国内産の農産物は安全と謳われていましたが、それは今となっては安全神話は崩壊している状態です。これによって損失を蒙るのは消費者や企業ですが、それ以上に毎日一生懸命消費者のために農産物を作っている農家にほかなりません。企業の食の安全性に対するリスクコミュニケーション問題や、消費者に基軸を置いた食品安全行政が今は見直されています。今や食の安全性を保持していくためには、企業や行政の力だけでは困難なのが現状です。一生懸命努力している農家が損をする、このような性格を立て直すためにも企業や行政では出来ないことを、NPOを通じて一生懸命努力している農家の方の支援を環境面から行っていくのが私たちの役目だと思っています。青少年ボランティア活動活性化というのは、いうなれば第一次産業分野では前述のような理由から絶対的に必要とされていますし、他の第一次産業関連団体には困難な取り組みでもNPOであれば取り組めることが多々あります。私はNPO法人農林畜水産環境管理協会の理事として、農学部において若者へのISO14001の普及、啓発活動を行う傍ら、NPOネオクリエーションという農作業支援団体を作りました。NPO法人農林畜水産環境管理協会が行っている農業における環境問題の改善に対する貢献にしても、NPOネオクリエーションで進めようとしている農作業支援についても、言ってしまうと農協も含めて農業関連団体が積極的に取り組むべき課題ではありますが、実際は対応が遅れています。農業分野における様々な問題点が農学部の授業を受けることで、また実際に現地を訪れ現場を見ることで露呈してきました。このような問題点が露呈しているにも関わらず農業関連団体などに就職しても、その問題点を改善することは困難です。よって当法人はNPO法人として立ち上げ、その問題点の解決の糸口となるべく活動を行っています。

そして青少年ボランティア活動の促進に関しては、環境に関する各種講演会の開催によって学生から意識改革、啓発を行っています。また、今後農家の方に直接人材を送り込んで農作業を体験してもらい、21世紀のこの時代だからこそ農業への関心を若い人々に持ってもらうべく活動を行っている次第です。

私の持っている他のNPOネオクリエーションですが、現在私が考えているのは、このNPO法人農林畜水産環境管理協会の一つの部署として、そういう農家の方と交流ができる場としてこのNPOが使えればよいと思っています。その理由ですが、やはり農業の持つ可能性というのは、先程ひゅーるぼんさんも色々と言われていましたが、青少年に関する健全育成という面において、自然の中で自分の手で農作物を育ててみるということがすごく私は大事だと思うのです。職能教育や環境教育などと言われていますが、先程川口さんが言われたように、上から下に降ろすのではなく、直接私たちが下から立ち上げるという形が一番良いと思います。実際にNPOネオクリエーションのほうもちょこちょこ活動はしているのですが、やはりどうしてもまだ学生が中心だったりするので、そこを何とかもっと年齢層を下げていければよいなと思います。

結論としては、NPOとは特定非営利活動とありますように、利益追求を目的としない団体です。このため通常の株式会社などと異なり、利潤のしがらみがなく、自由に小回りが効くため、NPOが地域に与える影響は今後ますます大きくなり、NPO団体それ自体もますます必要となってくると思います。その中で青少年のボランティアに直接的にかかわることではありませんが、21世紀はどうしても農業の時代になってくると思うので、その中で若い人たちが農家に就職するという形ではないにしても、自分たちで作物を育てるといって、その中で喜びをどんどん見出していっ

てくれればいいなと思っています。

以上、簡単ですが NPO 法人農林蓄水産環境管理協会の事例報告を終わります。どうもありがとうございました。

< 事例報告 3 >

NPO法人ふるさと文化研究会の活動事例報告

NPO 法人ふるさと文化研究会 石原 達也

特定非営利活動法人ふるさと文化研究会の会長をしています石原達也といたします。今日はよろしくお願いいたします。

ふるさと文化研究会は、特定非営利活動法人、NPO 法人格を取得させていただいているのですが、この会自体を立ち上げたのは去年、平成 13 年の 1 月になります。資料に書いてあると思うのですが、NPO 法人格を取得したのが同年の 8 月 31 日付ということで、まだ二年ばかりしか経っていません。ですからそれほど活動の幅も広がっていませんし、まだまだ試行錯誤の状態にありますので、今までやってきた活動を紹介させていただきまして、その後自分たちが何処に向かおうとしているのかということを中心に話させていただければと思います。

まず立ち上げの趣旨ですが、私たちは鳥取に暮らしていますが、それがどれほど恵まれた生活環境に囲まれているか、ということの意味するか、良く考える機会がなかなか少ないのが現状です。社会学者の有賀喜左衛門は、「自分を忘れた田舎人はまた自分を取り戻さなければならない」と言いました。この鳥取にはまだまだ多くの優れた文化が、だれにも知られることなく、眠っているのではないのでしょうか。簡単に噛み砕いて言いますと、自分たちは鳥取県というところで生活をしているわけですが、なかなか自分たちが住んでいるところの良さ、良いところというのは、なかなかずっとそこにいと分かりにくいのではないかと思います。ふるさと文化研究会は文化と付いているのですが、一般に文化といいますと伝統芸能的なことや、芸術的なことを想像されると思うのですが、自分たちの会としましては、ここに生活環境と書いているのですが、文化イコール生活環境ではないだろうか。自分たち人間が暮らして生活しているその周り、していることというのがそのまま文化になっていくのではないだろうかと考えまして、自分たちが住んでいるところの中、それは広い意味を含めまして、例えば自然環境やもちろん文化環境や生活環境など、そういうものの中で自分たちとしてここは良いところではないだろうか、ここはもう少しこうしたら良いのではないかと、そのように思うところを自分たちの目線で再発見をして、そこを改善していくような努力、また新たな提案などを出していければ良いなと思い活動しています。

次に申請にいたるまでの経緯ですが、これまで私たちは歴史、文化、自然にわたる様々な環境のあり方について考えてきました。ただし、その活動は個々人で行ってきたものであるため、物理的にも精神的にも限界がありました。それらのものが集会し、各地の得意分野を組み合わせ、お互いの不足を補い合う、そうすることでより効果的な活動を行い、また、その安定、継続を図るために特定非営利法人の設立を申請しました。私もまだ大学生ですが、会のメンバーというのは立ち上げ時点では大学生ばかりでした。それぞれ大学生個々人で自分たちの専門教科、例えば農学部だったら農学関係のこと、森林関係の学科だと森林関係のこと、また教育関係ですと子ども関係のことなど、それぞれで活動をしていたのですが、それぞれ個人でやっているばかりでは、自分が卒業をしてしまったり、自分のやる気が一辺萎えてしまったりするともう終わりになってしまう。そのまま終わらせてしまうというのでは、結果的に効果を生まないし、余計悪いことに

なってしまうのではないかとということで、そういう人たち全員で協力を行って様々なことをやってみる。そしてそれをまた NPO 法人という組織化にすることによって継続していける。例えば単純なことですが、自分たちの団体の連絡所を個人の家にしておく、そうするとその個人が抜けるとその連絡所はなくなってしまったり、電話番号が変わったりという困ったことになってしまう。しかし NPO 法人格を取得すればそういう電話番号や、預金通帳、口座みたいなものを法人格で取得できると。そういうことによって継続して引き継いでいけるのではないかと考えて特定非営利活動法人格を取得しました。

事業としては大きく三つあります。ふるさとの良さを再発見するための各種教室開催、具体的に言うと例えば自然教室、森林教室、工作教室などを含めましてワークショップのようなものも含めて、何か主体イベントのようなことをやること。そして地域の町づくり活性化支援、町に関する調査のようなことをすることから、何か提案を出してみる、何か町に関するイベントを出してみるというようなこと。そして NPO の実態調査および交流、ここでいう NPO というのは最初の説明にもあったのですが、どちらかというところと広義な NPO を考えていまして、鳥取県内で活躍している団体、個人、そのような方と交流したり、そのような方がやっている活動を調べることによって自分たちとの関連性を見つけていったり、一緒に協力して活動をしていけるのではないかとということで、こういうことをそのままというようにはなりません、大きく事業として立てて活動をしています。

これまでの主な活動をこれから紹介させていただきますが、まず平成 13 年度、先年度までの活動について紹介させていただきます。

これまで隔月で森林教室のようなものが行われていたのですが、自分たちのメンバーの中でそれに参加した者がいまして、今のままの森林教室では単純に言っておもしろくないのではないかと、もっと色々なことができるのではないかとということで、その企画、運営のところを提案させていただいて一緒に協力して運営をさせていただきました。

隔月開催ですので、一番最初の 4 月にたけったいというような名前にしているのですが、竹の子が出る時期でしたので竹の子を皆さん取ってその竹の筒を改造した飯盒といいますか、そういうので竹ご飯を炊いて、竹細工を子どもと一緒に作ってという、たけったいというイベントをしました。

6 月は押し花と自然観察をしました。まず自然観察で出会いの森の中をグルッと一周色々なところを見てまわりまして、その中で気になった花や葉っぱを取ってきてそれを押し花にして記念に持ってかえろうというのをやりました。

そして 8 月は昆虫採集ということで、夏はせみやかぶとむしなど子どもが好きな虫がいっぱい出る時期ですので、昆虫採集をしました。

11 月はちょっと寒くなってきて、紅葉も終わりかけのころですが、その頃の山を見てみようということで再び森林散策といいますか、自然観察のようなことを行いました。

次に智頭の山林へ行こうということで、これもまたメンバーの中に林業や山に関心が深いものがいまして、智頭町のほうに何度か交流というか、行って色々な山林を見学させてもらったりする者がいたり、また木造の校舎、木造の建物に興味を持っているものがいまして、木造の校舎などを見ることがあったりして、そういうものが全部智頭町のほうに多くありまして、この智頭町のそういう山林に関するような良いところをもっと多くの人に知ってもらったらどうだろうか、紹介をしてみてもうどうだろうかということで、簡単なツアーといいますか、山林見学会のような

ものを計画しました。具体的には人工林、人の手が入って整備された人工林と、人の手が入ったのだがそのまま放っておかれて荒れ果ててしまった人工林というのを見て、また天然林、そのままずっと人の手が入らずに、といっても多少は入っているのですが、天然林としてなってきた林というのを見ました。後は木造校舎。木造校舎も二種類といいますか、もう昭和、大正くらいからずっとそのまま木造として残っている校舎と最近また新たにコンクリートの校舎というのではなく、木造の校舎を建てたらどうだろうということで建てられた新造の木造校舎と両方を見学しました。夜はログハウスのキャンプ場のようなところがあり、そこに宿泊して、次の日には智頭町の奥のほうに保存集落のところがありまして、そこに行って村の中を見て回った後に山林や林業に関する意見交換会みたいなものを行いました。

次に未来の地球を組み立てようということで、間伐材わいわいテントという、間伐材を再利用したドーム型のテントがありまして、このドーム型のテントを鳥取大学の学生環境大学の学生の中の特に環境関係の活動をしているサークルや個人と環境関係の活動をしている NPO と共にこのドーム型のテントの組み立てをみんなで行いまして、結構大きなテントですので、この中に夜は入ってみんなで環境に関する意見交換会を試みようというイベントを開催しました。

鳥取ティーンズ情報誌というのは、最初の事業の中に町に関する活性化というのがあったのですが、鳥取の町の中で町を使っているというか、町にいる人たちの中で高校生があると思うのですが、その高校生たちが今自分たちが生活をしている鳥取の町を見てどう思っているのか、どういところのお店にしているのか、どうしたほうが良いと思っているのか、といったようなことに、高校生たちと交流しているうちに興味を持つことになりまして、では高校生たちの目線でそういう紹介する雑誌みたいなものを作ってはどうかということで、こういう雑誌を一冊作ってみました。

平成 13 年度はそういった感じで、多少以前までやっていた個人の活動をそのまま引き継いだような形でちょっと活動を幅広くやっていたのですが、平成 13 年度がそうやって終わっていったその反省というか、それからの相談などを踏まえて、平成 14 年度は三つの主な事業を行いました。

とっとり冒険きちというのは、後で詳しく説明いたしますが、鳥取市内の都市公園で子どもたちがもっと日常的に色々な体験を出来るような場所、公園をもっと有効に使って日常的に色々な体験ができるようになるのではないだろうかと考えた活動の一つ。

そして子ども自然体験クラブツリーハウスですが、これはもうそのまま鳥取の中で良いところというと、やはり海があり山があり、海と山がすごく近い距離にあり、そういう色々な自然環境に恵まれているということがやはり良いところではないかということで、子どもたちに鳥取県内の色々なところで、良いところ良いところで色々な自然体験を試みようというクラブを立ち上げて運営をしました。

もう一つは、里山を考えるワークショップです。これは身近な自然として、公園などでも自然体験ができるのではないかとということで活動もしているのですが、やはり身近な自然として考えた時に、里山というのがあると思います。その里山に関する活動というのは全国的に色々行われているのですが、鳥取ではまだそんなに行われていないのではないだろうか。そういう活動が始まる前段階としてまず里山とはどんなものなのか、ちょっと興味を持ってみませんかというような軽い形のワークショップを開催しました。

とっとり冒険きちの紹介ですが、目的としてとっとり冒険きちは、東京の世田谷区にプレイパーク冒険遊び場という遊び場があります。こちらは自分の責任で自由に遊ぶというのを趣旨とい

うか、掲げていまして、子どもたちが自分たちがしたいことを、自分たちがしたい遊びをできるようにしている公園があります。そこではもちろんそのまま公営管理ですと、事故がおきたり、子どもが何かなった時というのは公の責任になってしまって、それによって余計子どもにセーブがかかってしまうのではないかとということで、そこを自分の責任でということにして、子どもたちの遊びの幅を広げてあげようという公園です。そのような遊び場が鳥取にも出来たらという考えからまず始めたような活動です。

もう一つありまして、やはり先年度、森林教室というのをずっとやってきているうちに、子どもと関わっていると、そういう森林教室に来た時にはそういうことをしてみるのだが、普段は何をして遊んでいるのかというと、やはり家でテレビゲームをしているとか、友たちの家で遊んでいる。あまり外に遊びに行かない。公園などは全然行ったことがない、と子どもたちが言っているのを聞いて、何故そうやって外で遊ばないのだろうかというところから、公園で何かができるのではないかと考えまして、最初世田谷のプレイパークを知った時も、そこでは例えば子どもたちが落ち葉の中に潜って遊んだり、木に登ったりして遊んでいると。公園でそのようなことができるのなら鳥取の公園でもそういうことが出来て、もっと身近なところでそういう体験ができるのではないかと。そのような考えから活動を始めました。現在からはそういったところから出てきて、だんだんそれが子どもが集まり、子どもを連れのお母さんが集まりといったことをしていくうちに、そこは地域の拠点、子どもの居場所みたいなものになれば良いなと考えて活動をしています。

実際にどういうことをしているのかということですが、そういう鳥取市内の都市公園に、プレイリーダーと呼んでいるのですが、自分と同じ年代くらいの大学生や若い社会人の方が、様々な道具、材料、大工道具、かなづちやのこぎり、そういったものと、それで切る破材や竹、そういったものから針金や紙、ロープ、色々なものを用意して行って、後は子どもたちがこうしたい、ああしたいというのに合わせて様々な遊びを展開していくのをやっています。ですのでロープを一本持ってきていて最初はそのロープがハンモックみたいなものになっているのに、そのハンモックはつまらないと子どもが言って取ってしまって、気がついたら長縄跳びになっていたりと、綱引きになっていたりとというようなことをやっています。その様子ですが、普通の都市公園の木々を利用して間接的な遊具をしたり、リーダーと一緒に子どもが水遊びをしたりということをしています。現在は鳥取市内の二箇所の公園でやっています、それぞれ月一回ずつ活動をしています。当初は自分たちの会のメンバーだけでやっていたのですが、最近は少しずつ遊びにこられる保護者の方が片付けなどを協力してくれたりしています。このままだんだんと地域の中に入っていくというか、その地域の方と一緒に運営をしていくようにしていければ良いなと考えています。

今度は子ども自然体験クラブツリーハウスというものですが、目的は先程言いましたように、鳥取の中の豊かな自然を多くの子どもたちにもっと楽しんで欲しい。県内各所、各市町村によってそれぞれ良さといいますが、売りがあると思うのですが、そういったものを体験して行って、色々なことをしてもらいたいという趣旨で活動をしています。主な対象としては鳥取市内の子どもたちを募集して、主に鳥取県東部の様々な場所に出かけて行って活動をしています。

活動概要ですが、鳥取県内の様々なフィールドを利用して、月一回のペースでこちらも活動をしています。一番最初の4月は鳥取市内のキャンプ場で始めに交流を含めて、例えばテントの張り方や飯盒はこうやって炊くのだという基本的なことを勉強するようなキャンプをしました。5月は田植えの時期ということで、もともと地域のグループが子どもたちと一緒に田植えをしてい

る田んぼがありまして、そこに一緒に参加をさせてもらって田植え体験をさせていただきました。6月はハイキングということで山登りをしながら森林散策のようなものを行いました。7月はいかだ作りということで、無人島という程でもないのですが、池の中にある小さな島に行きまして、そこで子どもたちと一緒にいかだを作って、そこからもう一島、人が何人が立ったら埋まってしまわないかというような無人島まで渡ってみたいりました。8月は山村キャンプです。先程も出てきました智頭町の保存集落のほうに3泊4日間子どもたちと一緒に泊まりまして、その村の中で色々なことを体験するようなキャンプを行いました。9月は5月に植えた稲が実ってきましたので稲刈り体験を行いました。10月はその稲刈りをしたものがもち米でしたので、そのままお餅つきをして、その後は秋ですのでススキでクラフトなどをしました。11月はこれからで、実は今週末に行くのですが、星空観察と紙漉きなどをしたいと考えています。それから12月、1月、2月、3月は、予定ということでまた子どもたちと相談しながらスタッフで考えていきたいと考えています。

現在のツリーハウスの様子ですが、ツリーハウス自体を運営しているのは社会人の方と大学生、高校生というメンバーです。もちろんその対象は小学生以下の子どもたちとなっておりますが、これはやはり例えばひゅーるぽんのみなさんでも一緒だと思うのですが、大学生、高校生のメンバーが企画をしたり子どもたちの相手をしていくというのもまた自分たちにも跳ね返ってくるがありまして、子どもたちが成長していくというか、色々な経験を積み重ねていくと同時に、高校生や大学生も様々な経験を積み重ねていく。今は多少、会の主要メンバーが企画の主な中心を担っているところがあるのですが、だんだん例えば高校生のメンバーの人に企画してもらうことが出来たら良いなと考えています。

次に里山を考えるワークショップですが、前年度が森林教室をしたり、自然と人との関わりと良いですか、身近な自然の中でもっと色々なことをしたらどうかと考えてきたのですが、身近なところで造成されたところの周りには里山やそのようなところでもう少し何かできることを考えられないかということで、里山に関するワークショップを行いました。実は三回計画しているのですが、まだ二回しかやっていません。その二回は子どもたちを募集して里山に入って行ってその中を見たり、木の名前を調べたり、簡単な林業作業、除伐や下刈り、枝打ちなどをやってみたりしました。三回目はそれを踏まえまして子どもたちと共に一緒に来ていた大人の人たちと一緒に、その有効利用のようなことについて簡単に話をしてみたらと考えています。

先程までは主催事業ということで自分たちの団体だけと申しますが、がメインでやっている活動ですが、その他に他の団体と協力したり、支援をしたりして活動している活動があります。

その中の一つ目ですが、ちょっと長いタイトルで、癒しの里鳥取温泉おいしいところマップ制作委員会と言いまして、一番最初に部長さんのお話の中に、青少年100人委員会というのを開催したという話があったと思うのですが、私もその青少年100人委員会のメンバーとして加わらせていただいています。その中で高校生と鳥取について意見交換をしている時に、高校生の女の子が、自分は温泉が好きで、鳥取は良い温泉がたくさんあるのに、それをあまり広報していないのではないかと。もちろん広報していると思うのですが、自分から見たところで良いと思うところは評価されていなかったり、自分ももっとここを宣伝したらというところがアピールされていないと高校生の子が言いまして、自分としては温泉がある鳥取というところを癒しの里としてアピールしたいということ言いまして、それでは癒しの里としてアピールするために温泉や自分が良いと思うところを紹介するようなマップを作って、それを多くの人に配って見たらどうだろ

うかという話しになりまして、その高校生とそれを手伝う大学生とで制作委員会を立ち上げました。一応会としては事務局という形でその高校生の活動をサポートするような活動をしています。現在、11月4日まで国民文化祭が鳥取はあったのですが、その国民文化祭にあわせまして、鳥取県の東部地域のマップを作成しまして、その夢フェスタの最終日に配らせて頂きました。

その国民文化祭の関係のことですが、今回の鳥取の国民文化祭はみなさん御存知だと思うのですが、夢フェスタ鳥取と言いまして、この夢フェスタ鳥取にかかわるボランティアの人のお世話をするボランティアセンターが立ち上がりました。その中で運営メンバーという形で自分たち会のメンバーも加わらせていただきまして、その夢フェスタに関わる方のお世話をさせていただきました。

今度は鳥取大学ボランティアセンターと言いまして、鳥取大学の中には今、ボランティアを主体的に紹介するような組織がありません。自分たちもNPO活動をしていますし、その他にも大学生のボランティア団体というのはいくつかあるのですが、どうも狭い所に偏っていて、多くの大学生に知られていないのではないだろうか。そしてボランティアという言葉自体も、広き意味での市民活動情報と言いますか、今まで例えば福祉系や看護系のようなイメージ、奉仕みたいなイメージのところから抜け出ていて、自分たちの活動を紹介したような、例えば子どもたちとキャンプに出かけるというようなところから、更に行くところ、町に対する提案を出すようなところ、環境について考えるようなところ、様々な活動が、それがボランティアという言葉で当てはまるかどうかということは別にしまして、そういう市民活動情報のようなものがたくさんあって、その中にもっと大学生が多く参画できるのではないだろうか、多く参画していけばもっと色々なことが始められるのではないだろうかと考えまして、そろえた情報を紹介してコーディネートする組織として鳥取大学ボランティアセンターというものの立ち上げを、他の大学のメンバー、研究室のメンバーなどと考えまして、10月に立ち上げました。現在は実際は情報を集めたり、組織の中の建て直しをしたりしてしまして、本格的な活動はこれからとなっていますが、今度はこれからこのような形で鳥取大学に関わらず、将来的には鳥取県内の様々な学生にこういった情報を提供していければ良いと考えています。

今度は市民活動センター鳥取ということで、ちょっとエリアが広がっていくのですが、鳥取県内のNPOボランティア団体の支援組織、ネットワーク組織として、県民活動推進課の方々から説明していただいたほうが良いとは思いますが、市民活動センター鳥取というのが立ち上がりまして、その立ち上げの運営メンバーとしてもこの会のメンバーが参加させていただきました。

これからの課題としては、活動をやっていく中でこういうことを考えていきたいということ、多少自分の主観的なところもありますが並べさせていただきます。

まずは地域、学校との連携、共同。自分たちは大学生が中心となっていますので、大学生というのは大抵県外から鳥取に来たりしている人が多い。となるともちろん自分の家というのは県外にあるわけで、その自分たちのやっていることというのはそのまま地域になかなか結びつきにくいところがあります。そこをやはり大学生だけでやってしまうと、地域から浮いてしまう活動になっていって、そのまま地域に根ざしていかない。もちろんそれを考えて自分たちは特定非営利活動法人を取っているところもあるのですが、もっとその地域の方と共同で、また地域の方も自分たちの会の中に入ってもらって活動をしていかなければならないと考えています。地域の方との共同運営を行うと共に、地域行事、公民館行事などにもどんどん入っていって、地域のお祭り等にも一緒に入っていて活動していければ良いと考えています。

同時に子どもを対象とした活動をしているのですが、教育委員会や小学校との連携がいまいち別立てになっていて図れていない。もちろん別になっているところの良さもあるのですが、もう少し連携していく必要があるのではないかと今考えています。

また大学との連携。もちろん大学生ですので大学と連携しているのですが、もう少し大きいレベルで大学本体自体と共同で自分たちの団体が何かというようなことができるのではないだろうかというのを今考えています。

自主財源の確保。もちろん NPO 法人で自主運営できているところもあるとは思いますが、鳥取県内のこの NPO 法人はほとんどが自主運営ができなくて、自分たちの中で出してやっていくところが多い。そういうのを無くして自主財源でできるようにしたいということも考えています。

今回特定非営利活動法人のところにターゲットが向けられているということで、自分たちなりにもっとたくさんの方がいるのですが、ちょっと思ったところを、メリットとデメリットとをあげさせていただきました。自分たちが立ち上げる時に一番考えたことですが、まず継続化が図りやすいのではないだろうか。法人名義ができますし、個人の所に依存しなくて一応活動ができるという前提になっているということです。全国の情報が集まりやすいというのは、それはがんばればどこの団体でも一緒だと思うのですが、比較的 NPO 法人ということで情報が入ってくることもありますし、例えばこういう場に私が呼ばれることもあるということで、情報が入り易かったり、多少出しやすいのかなと考えています。信用についてですが、まだまだ特定非営利活動法人が世間的な認知が低いので、それほどこれが効果を発揮しているとは思えませんが、一部のところでは NPO 法人であるということで怪しげな宗教団体などではないということは分かっていただけというところが一応メリットではないかと。それとそのまま連携するのですが、デメリットのほうで、理解されにくい。特定非営利活動法人、NPO 法人と言われてもそれは何なのか分からない。それは何なのだとと言われることが多い。特に自分たちは大学生が中心の団体ですので、君たちは大学生のサークルなのか、それとも NPO 法人なのかということが良く分からない。そのせいで結果的に敷居が高いと言いますが、大学生から見るとちょっと NPO 法人という所に入るといのは気が引けると言いますが、ちょっと入りにくいところがある。何かよく分かりにくくて入りにくい。それが普通のサークルなどだとスッと入れるのですが、NPO 法人だと言われるとちょっと入りにくいところがある。逆に自分よりも上の世代の人になっていくと、その NPO 法人というのも良く分からないし、大学生がやっている大学サークルに入るというのも入りにくい、となってお互いに敷居が高くなってしまってなかなかメンバーを増やしていく所に負荷がかかるということが現在一番デメリットに感じています。後は事務手続きの増加と言いますが、やはり法人格を取っているので法人税を払わなければいけない、登記をしなければいけないなど様々な法律上の手続きの負荷がかかるということがデメリットではないかと考えています。

そのように、ちょっと飛んでしまいましたが、平成 13 年度、平成 14 年度と活動をしてきました。そういった中で自分たちがする役割というか、どういうのをしたら良いのだろうということで、広き意味でのコーディネーターとしてというか、ちょっとコーディネーターという言葉も適当ではないかとも感じています。そうやって人と人、それは他ジャンルの人を結びつけたり、また子どもと大人を結びつけたり、大学生と高校生を結びつけたり、大学と地域を結びつけたりというような、色々な人と人、またそういう様々な良い自然環境があって、そういうものを知らない人にそういうものを教えてあげる。そこと人を結んであげる。また、地域と学生を結びつけ

る。町の中に子どもの遊びみたいなものを入れる。そして子どもに居場所みたいなところ、こういう遊びはどうだろうというようなものを結びつけていく。そのように人と人を結びつけたり、そこに提案を出したりするような、そういったところが自分たちがすることとして意義があるのではないだろうか。そしてそういった中で地域と共同で行う活動を展開していったり、自分たちと同じような年代、それからちょっと下の年代、青少年と言いますか、広い意味での子どもと言いますか、本当に小学校、幼稚園の小さな子どもから大学生、場合によっては社会人まで、そういった人たちの活動のお手伝いをしたり、情報提供をしたり、そのようなところで自分たちの活動がこれから広げていけるのではないだろうか。端的に言うと青少年活動支援のようなところでもう少し活動が展開していけるのではないかと今は考えています。

お手元に配らせていただいた資料に一応現在、平成 14 度に行っている主催事業と先程の協力支援事業を書かせていただいています。

その他、審議会等への参加ということで、会のメンバーが参加させていただいている委員会などの名前も書かせていただいています。何故こんなにたくさんの中に入っているかというのがありますが、まずやはり自分たちは活動を始めてまだ一年ちょっとしか経っていませんので、まだ自分たちが活動をするフィールドと言いますか、自分たちが住んでいる鳥取というところでどのようなことが問題になっていて、どのようなことが話し合われているのか、話し合っている人たちはどんな人たちなのかということを知りたいというところがありまして、自分たちが興味あるジャンルは様々な所に一応委員会のような形で入らせていただきまして、そういう方たちと交流させていただきたいという趣旨で色々な所に入らせていただいています。

以上、簡単ですがこれで事例報告を終わります。ありがとうございました。